月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2014年4月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊26年目
創刊 1989年 Nr. 298

Albrecht Dürer Feldhase, 1502 Aquarell, Deckfarben, mit Deckweiß gehöht Albertina, Wien

アルブレヒト・デューラー（1471年5月21日ニュルンベルク生～1528年4月6日ニュルンベルク没）『野うさぎ』1502

アルベルティーナ 特別展『アルベルティーナの創立 デューラーとナポレオンの間 Die Gründung der Albertina. Zwischen Dürer und Napoleon』にて十年ぶりに公開中

杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 31

我が国の十六大学が参加する国際原子力教育ネットワークによる、文部科学省支援の学生交流プロジェクトが三月十三～十四日までベトナムのハノイ工科大学で開催された。学生同士による発表と討論を通じてコミュニケーション能力の向上と国際経験を積むのが目的である。ハノイ工科大学からは原子力工学・環境物理専攻の学生が八名、教師四名、国際協力部から三名の計十五名が参加した。我が国からは、選抜された長岡技術大学及び福井大学の修士二年各一名、金沢大学の学部四年生一名の計三人、引率教師として、同ネットワークの代表校である東京工業大学から二名と筆者の三名、合計六名が参加した。同様の会合が前の週に、京都大学、山梨大学及び岡山大学の学生計三名を引率して、インドネシアとマレーシアでも開催されている。

オープニングでは筆者から交流プロジェクトの趣旨を説明した。発表と討論を通じた国際交流が目的であり、主役は学生たちであることを強調した。その後、学生から各自の研究及び福島原子力発電所事故を踏まえた両国のエネルギー事情について発表があり、学生同士で討論を進めた。

十三日午後には、筆者から我が国の原子力安全研究に関する講演をし、先方教師からも安全研究について発表があり、教師間でも討論を行った。二日目はインターネットを利用したアジア地区の遠隔原子力教育の可能性について意見交換した。終了後は学生だけで意見交換を中心とする交流を行った。学生たちは皆ベトナムが初めてであり、現地学生から貴重な話を聞くとともに、大歓待を受けて感激した様子であった。なお、当初はこの後タイでも開催する計画だったが、バンコクでの暴動のため急遽キャンセルとなった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の古い郵便局について述べてみたい。ウィーンのシュヴェーデンプラッツから東に徒歩で約五分の位置にある郵便貯金局は、分離派の建築家オットー・ヴァーグナーの設計により一九〇六年に建設された。簡素なアールヌーヴォー様式の建物は、特に、自然光が屋根を通して内部空間に取り入れられ、ガラスブロックの床により明るく透明度の高い内部空間を実現した斬新さから建築史に残る名作との評価を受けている。外壁は大理石の板で隙間なく覆われ、細かいアルミの鋲が装飾を兼ねて大理石の板をその下の鉄筋コンクリートに留めている。さらに屋根には二体の巨大なアルミニウムの天使像が立ち、下界を見下ろしている。

一方、京都の三条通りに面する中京（なかぎょう）郵便局は、一九〇二年に建設されたネオルネサンス様式の赤レンガ造りの美しい外観が特徴である。一八七一年の郵便制度発足時に、東京・大阪とともに設けられた郵便役所を前身としており、我が国で最も歴史のある郵便局の一つである。一九七八年には、歴史的建築物として、日本で最初に外壁を残したままで内部のみを新築する建築手法を用いて改築された。また、一九九八年には建設省（当時）により、国立西洋美術館などとともに公共建築百選に選定されている。中京郵便局は現在も現役郵便局として業務を継続している。百年以上前の同じ頃に建設された両市の郵便局は、その伝統と美しさが市民の誇りとなっている。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、郵便貯金局から二～三分の所に住んでいたためその前を良く通ったが中に入ったことはなかった。家から歩いて約十分の京都文化博物館にはたまに訪れるが、中京郵便局はその隣なのにこちらも中に入ったことはなかった。それでも両市の有名な郵便局に接することができた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いした郵便貯金局の写真を欄外（下）に掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■